

## 新しいカモシカ像に向かって

講師 南正人

一昨年から、浅間山のニホンカモシカの調査を始めた。はじめは、この山域でニホンジカが増加し、それがカモシカにどのように影響を与えるかを調べる予定であった。また、浅間山の北側の山麓に広がる嬬恋村の広大なキャベツ畑でカモシカが食害を出しているとのことで、依頼されて調査を始めた。文献を調べたり現場での聞き取りをすると、個体差がかなりあるようだ。そもそも嬬恋村のキャベツ畑で被害が顕著になってきたのは、ここ5年から7年らしい。カモシカはずっと前から広く分布していた。個体数が急増してキャベツ畑周辺からあふれたか、あるいは、カモシカの中にキャベツの味を覚えた個体が出てきて、それが子供に伝わって行ったかのどちらかであろう。いずれにせよ、広大なキャベツ畑の中で、一部の地域しか食害がない。

発信器付きの首輪の値段が下がったこともあって、発信器を付けて本格的に調査を始めることにした。4年生の高田君が、浅間山の南斜面のある場所のカモシカの識別を始めてくれた。彼はすでに数頭のカモシカを識別し、調査地で出会ったカモシカの記録をしている。麻醉銃を使って、その中の人慣れした個体を捕獲して発信器を取り付けた。この2頭はたまたま年齢の異なる雄であった。

高田君の観察によると、この2頭が出会っても攻撃的にならずに、近くに座って反芻を始めたのを観察したり、かなり重複した行動圏をもっているらしい。また、発信器を付けた1頭と別の1頭が出会って、両方とも逃げ出したこともあったそうだ。さらに、嬬恋村では、500m四方の狭い範囲で猟友会が駆除のための追い出しをかけたら、そこからカモシカが9頭も出てきたらしい。これらは、どれも従来のカモシカ

の社会や行動の知見とは異なっているようである。

これまでのカモシカの研究を牽引して来られた岸元良輔さん(長野県環境保全研究所)や落合啓二さん(千葉県立博物館)の調査地では、それぞれカモシカの密度が高い。そこでは、カモシカの小さななわばりが隣接していて、隙間もない。なわばりをもてない個体は、その境界線を縫うようにして移動して生活しているらしい。一方、低密度のカモシカを観察されている望月敦史さんによれば、カモシカは季節移動し「ゆるやかに」暮らしているらしい。

ニホンジカの社会は可塑的であること



が指摘されてきた。一方、カモシカは固定的な社会をもつというイメージであった。しかし、そのような観念的なイメージは、いつも危険である。真実は、実際の生き物の中にある。カモシカは、それぞれの場所で、資源の質や量、周辺の同性や異性の個体数や密度、これらの季節変化、さらに駆除の有無や人慣れの程度、そして個性など、さまざまな要因の中で生活している。これらの要因がカモシカの社会や行動に影響を与えているに違いない。私は、そういう目でカモシカの社会も見たい。

4年生の高田君は4月に入って2週間連続の野外調査を始めている。原さんも嬬

恋村での長期調査の準備を始めた。地元の方や行政の協力もいただきながら、カモシ

カの新しい理解に向けて、学生諸君と調査を続けたい。